

第7回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「ミコの大切な大切なものは」

岩手県立福岡高等学校 3年 石澤咲希



賢治のまちから  
**高校生★童話大賞**

## 『ミコの大切な大切なものは』

「ミコ、しばらく離ればなれになるけど」

お母さんは単身赴任先へと出発する前の日、そう言つて白い花が二つ  
くつづいた。ピンどめをくれた。

「これ、あげるから大切にしてね」

あのときのお母さんの言葉は今もミコの耳に残っている。ミコが小さい  
ころからお母さんは家にいることが少なかつた。いつも朝早くに出かけて、  
夜遅くに帰ってきた。それでも仕事が休みの日はミコと遊ぶ時間を大切に  
してくれた。ミコはそのときが一番楽しかつた。だから、あまり一緒にい  
られないことに感じていた寂しさは、お母さんの前では心の奥にしまつて  
おいた。

働き者のお母さんは会社でも頼りにされていて、それで昇進して別の場  
所で働くことになつたそうだ。単身赴任することになつた、とお母さんに  
知らされたとき、ミコはとても落ち込んだ。長い間会えなくなるというこ  
とが寂しくてたまらなかつた。でも、そう伝えたお母さんの顔がとても悲  
しそうだつたから、ミコは一生懸命笑顔を作つて、もう私四年生だよ。お  
父さんもいるから大丈夫！ と元気に返事をした。

お母さんがいなくなつてから、ミコは毎日のようにもらつた。ピンどめを  
頭に飾つた。それだけで気持ちが安らいだし、それはミコの大切な宝物に  
なつた。

そして月日は流れていった。

お母さんは出来るだけ電話をかけてくれた。話しているときは心が弾ん





だ。でも、やつぱりミコの寂しい気持ちは時間とともに積もつていった。お父さんにもお母さんにも黙っていたが、自分はおいていかれたのではないか、捨てられたのではないか、とさえ考えてしまうこともあつた。もらったピンどめも宝物であることに変わりはなかつたが、自分の部屋の机の中にしまつておくことが多くなつた。

そしてちょうど今、ミコは寝る前に机の整理をしていて見つけた。ピンどめを眺めていたところだつた。

「お母さん・・」

ミコは小さくつぶやいて、そつとそれをしまつた。短くため息をつき、明日のためにもう寝ようとした。

そのときだつた。

突然部屋の窓ががらりと音を立てた。ミコはびくりと肩を震わせ、凍り付いた。つばをごくつと飲み込んでからおそるおそる窓を見ると、誰かが窓の縁に座つているのが見えた。二、三歳くらいの子どものようだつた。色黒の肌と、真っ白で無造作に伸ばされた髪の毛や身につけているぼろぼろになつたTシャツとズボンが特徴的だつた。

ミコはさすっかり混乱して、声を出すことも出来なかつた。自然と足が後ずさる。その子どもは部屋の中へずかずかと入ると、ミコの机をごそごそあさり、何かを取り出した。そしてそれをこちらに見せびらからす。ミコははつとする。それは間違いなくお母さんにもらつた。ピンどめだつた。子どもはキッキッキといたずらっぽい笑い声を上げるとあつという間に窓の外に逃げていつてしまつた。

ミコは何が起つたのかなかなか理解出来ず、しばらくぽかんと口を開けていた。しかし、ピンどめも一緒に持つていかれたのだと気づきあわてて窓の外を見た。外は暗く、もうあの子どもの姿はどこにもない。大事なピンどめが盗まれてしまつた。こんなことになるなら、机身離さ

ず持つていればよかつた。と泣きそうになつた。ミコは服のそでで涙をぬぐうと、急いで今起こつたことをお父さんに知らせようと、部屋のドアノブに手をかけた。

「おい、お前」

いきなり知らない声に後ろから話しかけられた。また心臓がばくばくと鳴り出す。さつきの子どもなのでは、と思い、ミコはゆっくりと振り返つた。すると、やはり窓のそばに誰かが立つていた。しかし、さつきの子どもではない。中学生くらいの背丈の少年だつた。青いスーツのような服を着て、それと同じ色の帽子を被つている。まるでお巡りさんのような格好だつた。その少年は真っ直ぐにこちらを見つめ、

「ここに小さな子どもみたいなの、来なかつた？」

と尋ねた。

すぐにさつきの子どものことが頭に浮かんだ。ミコはこくこくと首を縦に振る。それを確認した少年は、面倒くさそうな顔になり、遅かつたな、とつぶやくと、また出ていこうと窓の縁に足をかけた。

「ちょっと待つて……！」

ミコはかすれた声でなんとか少年を呼び止めた。少し心が落ち着いてきたようだ。それと同時に今起きていることをきちんと理解したいという気持ちがわき上がつてくる。

「あなた・誰なんですか？」

ミコはおずおずと少年に質問を投げかけた。それでも、知らない人であるということに、少し体を身構える。

「名前きくなら自分から名乗れ、礼儀知らず」

少年は足をおろして顔だけミコに向けると、ぶつきらぼうに言い返した。まるで知り合いであるかのような口調に、ミコはきょとんとしてしまう。それでも、ミコは少しためらつて深呼吸をしてから、

## 「・・ミコ」

と素直に名乗った。

## 「スバル」

即座に、少年は言い返した。スバル、とミコも心の中でつぶやいてから確認する。

## 「えっと、スバル君・・？」

「スバルクンじやなくてスバル。聞こえたろ。わざと間違えてるわけ？」

ミコはその返答にさらに拍子抜けし、緊張の糸もふっとんでしまった。自然と長いため息が流れ、顔がゆるむ。スバルはそんな様子を見て、まあいいけど、とつぶやき、軽くため息をついた。

「俺、急いでるんだけど。もういい？ あれを早く捕まえなきゃならないし」「捕まえる・・って、さつきの子を？」

## 「子じゃない。鬼小人」

オニ？ コビト？ 物語の中にはよく登場する生き物の名前にミコはぽかんと口を開けてしまった。さつきの子どもはどう見ても人間だったはずだ。

「人間が妖怪とか妖精とか呼んでいるだろ。あいつらは人間が大切にしてる物を盗む」

ミコはまだ頭の整理が出来なかつたが、ぱつとあのピン止めのことを思い出した。

「あの・・私、その鬼小人にピン止め盗られちゃつたの！」

ピン止めのこととなるとつい口調がきつくなってしまった。

それを聞いたスバルは、また面倒くさそうな顔をしたが、「そ、うか。じゃあ、俺が取り戻してくる」

と、またぶつきらぼうに言い放った。しかし、その言葉はやけに頼もしく、それこそ服装通りの警察官のようだつた。ミコがそう思ったことをスバル



に伝えたとき、スバルの表情が激変した。

### 「人間と一緒にするな」

どなつたわけではなかつた。しかし、その氷の様な表情と言葉はミコに突き刺さつた。そしてそれは、スバルが鬼小人と同じように人間ではないこと、さらにはスバルが人間を嫌つてゐるということをミコに理解させるには十分だつた。

ミコは自分は嫌われてしまつたのだと落ち込み、うつむいたままごめんなさい、と小さく謝つた。気づかれないようにはスバルの表情をうかがうと、さつきまでのぶつきらぼうで面倒くさそうな表情に戻つていた。

「そういうわけだから、俺は鬼小人を捕まえに行く」

「・・・待つて！・・・私も捕まえる」

ミコは反射的にスバルにそう言つてしまつた。お母さんにもらつたピンどめのことが心配で、すぐにでも取り戻したいという気持ちが強かつたし、さつきのスバルの言葉が気になつたからだ。このままスバルとぎすぎすしてた雰囲気で別れるのも嫌だつた。

「ダメ。・・・つて言つてもついてくるだろお前。別にいいけどじやまするな」

ミコから目を離しながらスバルはそう告げた。スバルなりにさつきのことをするないと謝つてゐるようで、ミコは少し気が楽になつた。

「ありがとう・・・頑張るから」

お父さんに気づかれないためにも、ミコも部屋の窓から外に出ることになつた。裸足のまま外に探しに行くことをやつぱりためらつてしまつたが、スバルが面倒くさそうに手をさしのべてくれたため、ミコは照れて頬を染めながらもその手をとつて夜の空の下へ飛び出した。

スバルは地面をじっと見つめながら早歩きでずんずんと進んでいった。むき出しの足からアスファルトの冷たさが伝わつてくる。ミコにとつて、





こんな夜中に外を歩くのは初めてで恐怖感がわいてきたが、スバルはスピードを落としてくれないので、見失わないよう頑張つてついていった。

スバルは、鬼小人がつけた足跡が見えるのだ、と言つていた。ミコも目をこらして地面を見たが、全く分からぬ。

どのくらい歩いただろう。スバルが突然小さな空き地の前で止まつた。

スバルが物陰に隠れるように手で指示を出す。瞬時にミコは鬼小人が見つかつたのだと理解した。物音を立てないようにしてそつと空き地をのぞくと、まだらに伸びた草原に何かが座つているのが見えた。

小さな体、色黒の肌と、真っ白な髪の毛、その見覚えのある姿は確かにミコが部屋で見たあの子どもだった。ミコから盗んだ白い花のミコのピン止めをさがして、じろじろと眺めている。

ミコの心臓がどんどん高鳴つていつた。無意識のうちに体が前に乗り出す。すかさずスバルが腕でミコを押し止めた。

「ここにいろ。捕まえてくる」

「・・私も・・手伝いたい！」

大切なピン止めが目の前にあるのに、じつとしているということが出来なかつたのだ。

「・・はいはい。じゃあ俺がお前のどこまであれを追い込む。しつかり捕まえろよ」

淡々と了解してくれたスバルにミコは大きく首を縦に振る。

スバルは深呼吸をすると、勢いよく飛び出した。鬼小人めがけて飛ぶよう走っていく。

鬼小人は突然の出来事に慌てふためき、キーキーと叫びながらどうにかスバルから逃げようとしている。スバルはスピードを落とすことなく確實に鬼小人を追いつめていった。その鮮やかな動きにミコは見とれてしまう。

そしてついに追い込まれた鬼小人がミコをめがけて突進してきた。はつ



賢治のまちから

## 高校生☆電話大賞

として身構える。だが、鬼小人の足は思ったよりも速く、捕まえようとした瞬間鬼小人と激突してしまった。

ミコは衝撃と痛みに目をつむってしまう。そのときだつた。

ミコの頭の中に次々と様々な映像が映し出されたのだ。ミコは驚いてしりもちをついたまま固まってしまった。

「捕まえるんじゃなかつたの？」

はつとして、ミコは我に返つた。スバルがあきれたようにミコを見下ろしている。その手はがっしりと鬼小人の服をつかんでいた。キーキーと鬼小人が甲高い声を上げて暴れている。スバルはそれに全く動じることなく、騒ぎ立てる鬼小人をにらみつけた。それを見た鬼小人はびくりと体を震わせたが、同じようににらみかえすと、ぶすくれた顔をしてその場にどつかりとあぐらをかいて座り込んだ。

「あとはお前がどうにかしろ。こいつはなかなか盗んだものを返そうとしないからな」

と、スバルが面倒くさそうに言う。なるほど、鬼小人はミコのピン止めをしつかりと握りしめ、全く離さうとしない。

「あの…私のピン止め返してくれる…？」

ミコが頼み込むように尋ねると、鬼小人はキーキーと嫌みつたらしく声を上げ、握ったピン止めを乱暴に背中に隠した。それは本当に幼い子どものように、ついため息がもれてしまう。視線でスバルに助けを求めたが、さすがのスバルも肩をすくめてみせた。

どうしようもなくなつたミコは、その場をとりつくるようにさつき自分に起こつた不思議な出来事をスバルに伝えようと言葉を探した。

「あの、さつき、鬼小人とぶつかつたとき…変な映像みたいのが頭に浮かんできたの」

それを聞いたスバルは少し驚いて、何かを考えるようなしぐさをした後、

「それ・・ゴミとか捨てられた物とか出てこなかつた？」

と、ミコが見たものをぴたりと当てた。そう、確かに思い出してもれば、鬼小人とぶつかつた瞬間、捨てられたおもちゃや機械、山積みにされたゴミの映像がミコの頭をよぎつていつたのだ。

「これ・・なんだか分かる？」

ミコは質問せずにいられず、スバルの顔をうかがつた。スバルは、なかなか口を開こうとしない。うつむいて話すのをためらつているようだつた。

ミコは気になつたが、話したくないのかもしれないと思って、話したくないならそれでもいい、とあわてて伝えようとした。そのとき、スバルは長くため息をついてゆっくりと口を開いた。

「こいつだつてその辺からわいて出てくるわけじやない」

そう言いながら軽く鬼小人に目をやる。

「こいつは・・物に宿つた心が集まつて生まれるんだ」

「・・物に宿つた心・・？」

「しかも、人に捨てられた多くの物の思いだ。悲しさとか、つらさとか、恨みもあるかも。それから生まれるらしい」

ミコは黙つてスバルの話に耳を傾けた。

「こいつが大切な物を盗むのにも理由がある。自分は大事にされなかつた。だから、大事にされてる物がうらやましいし、ねたましい、それに寂しいし。だから、盗む」

「そうだつたんだ・・」

ミコはそれしか返事を返せず、相変わらずぶすくれた顔で座つてゐる鬼小人を見つめた。うらやましいとか寂しいという気持ちはミコにも痛いほど分かつた。またお母さんのが頭に浮かぶ。

「私もその気持ち、わかるよ。そのピンどめはお母さんが仕事で家からいな



## 賢治のまちから 高校生☆電話大賞



賀治のまちから

## 高校生☆電話大賞

くなる前にもらつたの。お母さんがいなくなつてからずつと寂しかつた。も  
しかしてお母さんに捨てられたんぢやないかって思つたこともあつたの」

ミコの気持ちが言葉となつて外にあふれ出す。無意識に自分と鬼小人を  
重ねてしまつたのかも知れない。

「かわいそうだね・・。鬼小人も」

ミコは素直に思つたことをスバルに伝えた。

しかしその言葉を聞いたとたん、スバルの表情が突然変わり、氷のよう  
な瞳がミコを見すえた。

「かわいそーか。・・だから人間は嫌いなんだ」

思いもしなかつたスバルの低く冷たい声に、ミコはたじろぎ、ただスバ  
ルの顔を見つめる。

「お前だつて物をすててきただろ。簡単に」

「・・それは・・」

「捨てられる物だけじゃない。そういうものに出会つたときだけ、かわいそ  
うだと哀れんで、その後は何くわぬ顔でひどいことをやつてのけるだろ人  
間は。都合のいいときだけいい人ぶるな」

ミコは何も言えなくなつてしまつた。スバルの言うとおりだつた。ミコ  
だつてたくさんの物を捨ててきたことは事実だつた。テレビで多くの捨て  
られる物を見て、かわいそーだと思つた。でも、その次の日は平氣な顔で  
使わなくなつた物を捨てていた。それも間違いない。ミコは、結局自分の  
ことしか考えていなかつたのだということを思い知らされた。スバルの顔  
をまつすぐに見られなくなつてうつむいた。スバルもそれから黙り込んだ。  
鬼小人でさえ目を丸くして、身動き一つしようどしない。

ミコは涙が出てきそうになつた。つらさや悲しさや恥ずかしさが入り交  
じつた物が心を埋め尽くしていくのが分かつた。震える唇を一生懸命かみ

しめて、泣くのをこらえた。こんなことを言われるならば、スバルについてこなければ良かつたとさえ思えてきて、家がとても恋しくなつた。

木の葉がカサカサ風に揺れる音がやけに大きく聞こえた。ミコはおそるおそるスバルのほうを横目で見てみた。スバルの顔からはさつきの冷たさは消えていて、まゆをしかめてうつむいている。

ミコは一言スバルに謝るべきなのだと思った。しかし、なかなか言葉が前に出てこない。涙も止まらず頬を伝つていった。

いた。

「俺は・・どうやつて生まれたか・・お前分かる?」

先に口を開いたのはスバルだった。

「え・・分からないよ」

ミコは少しどもり、ためらいながらぼそぼそと返事を返す。

「俺は人の心から生まれた。人間の中途半端な正義感、偽善、崩れていった夢、そんなのが集まって生まれたんだ」

そこでスバルは一息つき、空を仰ぐようにして言つた。

「人間は嫌いだ。でも恨んでない。人間がいないと俺はいないんだし。気づいたら人間のために働いてたし。・・鬼小人がどうやつて生まれたかを知つたとき、俺も気の毒に思つた。けど、だからつて人間の大切な物を盗むことは許されない。半端な正義は持ちたくないなつたし。だから俺は鬼小人を捕まえることを絶対やめない」

その目に迷いは全くなかった。スバルの横顔がずっと大人びて見えた。ミコは涙を袖でぬぐい、立ち上がってスバルの目の前まで歩いていって、

「ごめんね・・スバル」

と、謝つた。心にたまつたどんよりしたもやが少しずつ消えていく。

「別にいいけど」



# 賢治のまちから 高校生☆電話大賞



スバルがぶつきらぼうに言い返す。その言葉と表情にはほんの少しだけ優しさが含まれているようで、ミコの顔から自然と笑みがこぼれた。

そして、ミコは長く息を吐き出すと、鬼小人に向き直り同じ目線までしゃがみ込んで、その瞳をしっかりと見つめた。

鬼小人はミコをにらみつけ、身構えるようなしぐさをする。

「あなたの気持ちが分かるって言つたのは本当だよ。でも、それのせいにして自分はかわいそくなんだって思いこんだり、誰かのものを奪つたりしちゃいけないんだ。…ごめんなさい。私やつぱり都合のいいこと言つてるよね」ミコの口から次々と言葉がつむがれていく。

「あなたが生まれたのは私のせいかもしない。だから…もつとこれからはいろんなものにちゃんと気を配つて、あなたみたいに誰かがもうつらい思いをすることがないように…努力したいって思つたの」

言いたいことは全部伝えた。

スバルは黙つてその様子を見守つていた。鬼小人も視線をそらさなかつた。鬼小人はミコの全ての言葉を聞き取つた後、小さくなつてうつむきながら、ピン止めを握つた手をゆっくりとミコに差し出した。ミコは、ありがとう、と優しく微笑みかけ、そのピン止めを大事そうに受け取る。

鬼小人は手を乱暴に引っ込めると、かすかにいたずらっぽい表情を浮かべ、だんだん透けてとうとう見えなくなつてしまつた。

ミコは何が起きたのか分からなくて、辺りを見回して鬼小人を探した。

「心が物に戻つた。…少しは嬉しかつたのかも。でもお前、言うのは簡単だからな」

スバルがまたぶつきらぼうに言う。しかし、その言葉に嫌味は少しも感じられなかつた。むしろ清々しかつた。

「うん、わかつてる」

ミコは静かにつぶやきながら、受け取つたピン止めを見つめた。そのとき、



またさつきのように頭に映像が流れたのだ。ミコが見たのは、ミコと楽しそうに遊ぶお母さんの姿だった。優しそうな笑顔を浮かべている。

「…大事なこと、忘れてたよ。お母さん、いつも私のこと大切にしてくれてたのに…私、捨てられたなんて…」

また涙があふれてきそうになる。ミコはピン止めをぎゅっと抱きしめた。

「…まあ、一件落着か」

スバルはすたすたと来た道を戻り始めた。ミコもあわてて後を追う。

「スバルも…ありがとう」

歩きながら、ミコは精一杯の感謝の気持ちとほんの少しの照れくささを込めてスバルにお礼をいった。

「別に…。俺も…ありがとう、ミコ」

木の葉の音にかき消されてしまうような小さな言葉だったが、ミコの耳にはしつかりと届いた。

早く帰らないとお前まずいだろ、と言い放つと、スバルは走り始める。ミコもうん、と元気に返事をしてそれについていった。

暗い夜道ももう怖くも何ともなかつた。